ブーメランニング

こもこびす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブーメランニング

【Ｎコード】
Ｎ２６７６Ｙ

【作者名】
こもこびす

【あらすじ】
ある日頭の中でブーメランが回転し始めた。その大きな周回軌道はどこにいきつくのか。

1

気がつくと頭の中でブーメランが回っていた。一体いつ、どの地平においてどんな人間がそのブーメランを放ったのか見当もつかないが、ふと気がつくとブーメランは僕の頭の中でひゅんひゅんと空を切り裂きながら回転していた。

一般的に、かつ合理的に考えて、人間の頭の中にはブーメランの回転するような空間は存在しない。仮に僕の頭をチェーンソーかなにかでたたき切って、中身をステンレスのボウルにぶちまけたところで、オーストラリアの赤土やその上に広がるからりとした青空など、おそらくひとかけらも出てこないだろう。

あるいは、こんなことをいうとあなたは、僕が何らかのメタファーについて語ろうとしているのではないかと身構えるかもしれない。ブーメランの描く軌道とその独特のフォルムに象徴的な意味を託し、「環境破壊の愚かしさ」とか、「日常の中に潜む狂気」だとかについて語るのではないか、と。

でもどうか安心して欲しい。これはほんとうに、ただのブーメランなのだ。形而上学的でもなければ、超自然的なものでもない、いってみればただの木切れだ。もちろん僕だって最初はいろいろな憶測に駆り立てられた。人は自分の理解できないものに遭遇したとき、実体よりもおおきくておそろしいものを想像してしまう。ブロッケンの山に時折現れる、巨人のように。

前置きが長くなってしまった。しかし物語が動き出すには助走が必要だ。蒸気機関の運動に先立ち、石炭をくべ炉に熱を持たせるように。本番前の運動選手が、短時間でハードな走り込みをして細胞

を目覚めさせるように。そしてこれから動かそうとしているのは、とりわけ大掛かりな機関によるややこしい運動である。

だから、少しだけ自己紹介に付き合ってほしい。

2

はじめに考えたのは、これはブーメランではなくて、ブーメラン状のＵＦＯのようなものではないかということだった。人知の及ばないオーバーテクノロジーを手にした地球外生命体ならば、人間の頭蓋の内側でなにかを回転させることも可能なのではないか思えた。しかしそうやって陰謀論的なまなざしで見れば見るほど、ブーメランは何の変哲も無いブーメランらしさを増していくように思えた。ひゅんひゅんという風の音には、陰謀の影も見えなければ有害電波のノイズも聞こえなかった。宇宙人たちが樫の木を切り倒して、そこからおあつらえ向きの木切れを切り出し、小刀で滑らかなＶの字を作っているのを想像したあたりでもうどうでも良くなってしまった。

つぎに閃いたのは、自分の精神がおかしくなっているのではないかということだった。気が狂っているという推測は極めて妥当で、なぜこれをはじめに思いつかずＵＦＯなどという突拍子も無い可能性を探ったのかと自分で自分が情けなくなった。それでも、自分が精神に異常をきたすなどとはとてもじゃないが考えられなかった。誤解を恐れずあけすけに言えば、それまで僕は自分のことをまっとうな、というか、出来の良い人間だと思っていた。もし仮に世界に人間の総合的な能力に関するランキングがあったとすれば、どんなに厳しく謙虚に見積もっても「中の上」くらいのランクにはいる人間だと思っていた。

東証一部上場の総合化学メーカーに勤務する父とピアノ講師の母との間に生まれ、子供時代は東京近郊の新興住宅地で育った。昔から、周囲の大人が自分に対してどんなことをして欲しいと思っているのか、どんなことをして欲しくないと思っているのかは簡単に把

握することができた。そういった勘の強い子供はたいていの場合、周囲の期待に応えようと自分のエゴを枠にはめ込もうとする余り、鬱屈した少年時代を過ごすものだが、僕にはそれがなかった。それはおそらく、僕が比較的早い時期に人間の抱える致命的な「脆さ」について直感的に気付いてしまったからだと思う。
いったい何がきっかけだったのか今となってはどうしても思い出せないのだが、少なくとも小学校低学年の時点で、僕は両親を含めた周囲の大人に対し、小動物に対して抱くような哀れみ・慈しみの感情を抱いていた。どんなに体が大きく、経験に富み威厳に満ちた顔をした人間であっても、その存在の真ん中、核の部分には生まれたままの柔らかな赤ん坊が手付かずのまま眠っている。そんなイメージがいつの間にか僕の意識の奥底にしっかりと根を張っていた。
幾重にも連なる厚いヴェールのような意識をするりと潜り抜け、他者のもつその核を意図的に探り出せる能力が自分にあることを、僕は自覚していた。その気になれば、短いセンテンスを発するだけでその核をピンポイントに刺し貫き、破壊することも。核を壊された人はどうなってしまうのか、そこから先は考えたくはなかった。

そのためだろう、どんな理不尽な目にあっても、僕には不平も不満も沸いては来なかった。意にそぐわないことをさせられたり、望んだものを拒絶されたときも、自然と優しい気持ちになることができた。
物分りのいい子供だったと思う。ただ、いつか自分のこの力が、ふとした不注意で誰かを致命的に損なわせてしまうのではないか。そんな不安が亡霊のように僕の脳裏を横切ることがたびたびあった。その不安からなんとか逃れるため、周囲の人間には最大限の誠意をもって接し、決して怒らず、やれといわれたことは実直にやり遂げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2676y/

ブーメランニング

2011年11月6日02時05分発行